

<前回>オリエンテーション

後期：キリスト教と経済・環境

後期オリエンテーション

3. 自然神学の拡張と社会科学

3-1：自然神学とは何か

3-2：自然神学と社会科学

3-3：自然神学の規範的場としての聖書解釈

4. キリスト教思想と経済・環境

4-1：キリスト教思想から見た環境と経済

4-2：聖書と環境思想

1：創造論から終末論へ

2：社会的構想力——モデル、ヴィジョン

3：エコ・フェミニズム

4-3：聖書と経済思想

1：経済神学と聖書

2：契約思想の射程

12/4

3：イエス、パウロ、黙示論

12/11

4：賀川豊彦とキリスト教社会主義

12/18

4-4：現代神学の動向から

1：プロセス神学

1/8

2：政治神学

3：科学技術の神学

1/22

<前回>エコ・フェミニズム

(1) ローズマリー・ラトフォード・リューサー

1. 問題提起：挑戦 (97-98)

・エコフェミニズムは、古典的なキリスト教神学と、家父長的な世界観によって形成されたすべての古典的宗教とに対する徹底した挑戦である。キリスト教に焦点が絞られる。

・女性への支配と自然への支配の相互連関を吟味し、それから解放を目指す。

性差別と環境的搾取の間に見られるこの関係性：文化—象徴的レベルと社会経済的レベルの二つのレベルが存在。前者は後者を反映し承認するイデオロギー的な上部構造と考えられる。後者は、事物の自然本性あるいは神（神々）の意志との関連で正当化される。女性、奴隷、動物、土地への男性の支配関係は財産・所有として法的に指定され、この法は神（神々）によって与えられるという連関である。

自然・物質・身体・女性

2. 支配関係の歴史的考察——神話からアウグスティヌス、近代まで (98-106)

1) 古代バビロニアの世界創世神話

2) 原初の平等とその喪失

・ヘブライの物語：神の像におけるすべての人間の平等という見方の基礎となり得るもの

であったが、後のキリスト教はこの方向性を取らなかった。男性が規範的な人間であり、女性は派生的。

・ヘブライ的希望：元来は、パラダイスが回復される未来の時、地上的であり、可死性に拘束されている。

・初期のキリスト教的運動の中には、あらゆる支配的關係からのキリスト教における解放を示唆するものが見られる。パウロのガラテヤの信徒への手紙3：28。原初の平等性。

3)近代、フェミニスト神学への流れ（省略）

3. エコフェミニスト的なキリスト教伝統の再構築にむけて(106-110)

1)自己論（人間理解）

・プラトニズム的な心身二元論への挑戦

エコロジカルな自己意識：宇宙プロセスの全体を祝福し、我々の生命を地球共同体全体の生命と調和させることが必要である。これは、相互限定と交互的な生付与的はぐくみの霊性と倫理を要求する。

2)悪と救済

悪の存在しない原初のパラダイスと、悪と死が克服される未来のパラダイスという前提を放棄すること。

・悪は常に我々と共にある。

罪は、可死性、有限性、脆弱性から逃避しようとする努力のうちにある。逃避の欲望は、他の人間や土地や動物を独占しようとする力ある男によって有害な形が与えられる。

非脆弱さ確保しようとする努力が他者や地球を犠牲にして力を蓄えようする際限のないプロセスを強いる。ターゲットしての女性。

3)神・キリスト・啓示

・神論：三位一体的神とは、宇宙的、惑星的、社会的そして人格的な生命をはぐくみ贖う神であり、その名はソフィア、聖なる知恵である。

・キリスト論：英雄的戦士というメシア神話の問題性。復讐の乾きと結びつく。破壊の循環を再生産し、新しい犠牲を生み出す。メシア神話を転換しなければならない。

・啓示：自然の内における啓示。自然という書物に照らして、歴史的聖書を読むこと。

自然の両義性

自然は破壊的で悲劇的な顔を持っている。

単なる感傷主義は通用しない。ペリカンの二つの卵（マクダニエル）の残酷さ。

(2) エコ・フェミニズムからケアの倫理へ——マクフェイグの場合

1. モデル→思想と倫理（概念と実践）

2. モデルに基づく生の形態化→実践

3. 自然の神学：神学的な自然理解→自然観の転換

1)新しい感受性へ：構想力（Einbildungskraft）のレベルでの転換から、存在（Sein）のレベルでの転換へ

2)創造の善性：人間から被造物全体へ拡張

西欧ヒューマニズムの功績と限界、たとえばカント

3)「自然」とは？ 自然の問題は自然観の問題となる。

subject-object & subject-subjects

4) 注意と愛

5) 二つの目（視線）のあり方

two very different ways of seeing the world (30)

The arrogant eye simplifies in order to control, denying complexity, since it cannot control what it cannot understand. (33)

good for me and their human beings

The loving eye is not the opposite of the arrogant eye: it does not substitute self-denial, romantic fusion, and subservience for distance, objectification, and exploitation. Rather it suggests something novel in Western ways of knowing: acknowledgement of and respect for the other as subject. (34)

6) ケア倫理：権利とケア

an environmental ethic of care

(3) ケアの倫理

・Caring は、人間形成＝教育(Bildung)の問題となる。

4 - 3 : 聖書と経済思想1 : 経済神学と聖書

(1) 宗教と経済、問いの所在

1. 宗教と経済は、宗教思想にとって、いわば隠れた問いである。「欲望」という問題。

・近代キリスト教思想の前提→宗教の内面化・精神化＝私事化

聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法

本来の宗教、キリスト教は、御利益宗教ではない。魂・心情の純粋さが宗教の真髄である。

しかし、献金とは、経済的な側面を有さないのか、聖職者は、実質的に職業化しているのではないか。建前論を超えられない、宗教の抽象的な議論。

・現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。

↓

経済・富・欲望は、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。

この経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。

聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化などまず、ここに問題の核心が存在することを認めるところから出発するとどうなるか。

2. Sallie McFague, "God's Household: Christianity, Economics, and Planetary Living," in: Paul F. Knitter & Chandra Muzaffar (eds.), *Subverting Greed. Religious Perspectives on the Global Economy*, Orbis Books, 2002.

Abstract

Religions help us from the basic assumptions about what we are and how we should act in the world. Presently, two worldviews with accompanying economic rules for planetary living vie for our loyalty. One is the neoclassical market model with its ideology of greed and its goal of growth: the consumer society. The other is the ecological economic model with its creed of

interdependence and its goal of planetary sustainability: the just society. Many Christians, particularly middle-class North Americans, are presently captive to the first model. Christianity should, however, advocate the second model --- the one that sees the good of all beings, including human beings, as dependent on a sustainable planet where resources are justly distributed. The ecological economic model is not Christian economics; rather, it is an economic model that faintly resembles the radical inclusiveness and open table of Jesus' Kingdom of God. It is better than the market model for human beings and the planet. It is also a more appropriate one for Christians to support. (119)

None of the world's major religions has as its maxim: "Blessed are the greedy." Often, however, religion is not considered to be *about* economics.; in fact, many in most societies do not want religion to intrude into economics.

But most religions know better. They know that economics is about human well-being, about who eats and who does not, who has clothes and shelter and who does not, who has the basics for a decent life and who does not. Economics is about life and death , as well as the quality of life. Economics is not just about money, but about sharing scarce resources among all who need them. (119) Economic is a justice issue, so why would religions not be concerned with it ?

Christian faith embraces the *world* --- all of creation and not just human being ... all of creation, including dying nature as well as oppressed people, are with God's "economy," God's "household."
oikos: economics, ecology, and ecumenical

we are members of a society, now a worldwide one, that accepts, almost without question, an economic theory that supports insatiable greed on the part of individual. This theory lies behind present-day market capitalism (120) and, since the death of communism and the decline of socialism, it is accepted by most ordinary people as a description of the way things are and must be. Market capitalism is seen as the "truth."

This realization --- that economics is not a "hard" science, but an ideology with an assumed anthropology and goal for the planet ... --- is the first step in seeing things otherwise.

Christianity and Economics

Is ecological economics "Christian" economics? No, not in any one-on-one or exclusive sense. It is , however, an emerging economic model that is being increasingly set forth and supported by a wide range of NGOs ... and protest movements. (121)

the restoration of nature must also lie, at least in part, with Christianity. I believe it does, but also with other world religions as well as with education government, economics, and science. The environmental crisis creates a "planetary agenda," involving all people, all areas of expertise, all religions. (122)

Neoclassical and ecological economics

The two worldviews --- neoclassical economic(s) and ecological economic(s)--- are dramatically different;

Both are models, interpretations of the world and our place in it: neither is a description of fact.
(124)

Contemporary neoclassical economics, however, generally deny that economics is about value. But this denial is questionable.

At the base of neoclassical economics is an anthropology: human beings are individual motivated by self-interest.

Neoclassical economics has one value: the monetary fulfillment of individuals provided they compete successfully for the resources. (125)

the view of human nature is individualism and the goal is economic growth.

we turn to the alternative ecological economic paradigm

Ecological economics claims we cannot survive... unless we acknowledge our profound dependence on one another and the earth.

sustainability and distributive justice (126)

John Dominic Crossan: "The open commensality and radical egalitarianism of Jesus' kingdom of God are more terrifying than anything we have ever imagined, and even if we can never accept it, we should not explain it away as something else" (Crossan 1994. 73-74) (130)

3. マクフェイグに対して

- ・エコロジカルな経済学の内実あるいは詳細は？
- ・エコロジカルな経済モデルを支える人間理解は、現代の自由主義対共同体主義という論争において共同体主義の立場に立つことになるのか？
- ・問題のグローバルな性格と多元的な取り組みという構図を描くことは可能か？ どこに多元的な諸立場がコミュニケーション可能になる地平を見出しうるのか？（自然神学？）
- ・単一の聖書的経済学ではなく、諸経済学の共有する方向性？ バルト的？

(2) 聖書の宗教と経済との多様な関連性

4. 聖書から特定の政治システムを一義的に導出できない。経済・富の問題も同様である。富者批判という基調と祝福としての富理解まで。

↓

キリスト教思想は富に対して、いかなる理論を構築できるか？

5. 富者批判：

- (1) 預言者の富者批判・弱者の視点、正義＝神の下の平等

「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を追わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」（イザヤ 10.1-2）

- (2) 黙示文学：富める者の不正はこの世界の悪の支配の徴。神の国ではこの秩序は逆転。

「わざわざいなるかな、きみたち富める者。きみたちは、自分の富を頼みとした。しかし、きみたちは、自分の富を失うであろう」（エチオピア語エノク 94.8）

- (3) イエスの富者批判。

「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」
「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。」
(ルカ 6:20-25)

(4) マリアの讃歌。

「思い上がる者を打ち散らし／権力ある者をその座から引き下ろし／富める者を空腹のまま追い返されます」、「身分の低い者を高く上げ／飢えた人を良いもので満たし」(ルカ 1:47-55)

(5) 原始キリスト教会と愛の共産主義 (財産の共有)。

「信じた人々の群は心も思いも一つにして、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべて共有していた。」(使徒言行録 4:32)

6. 物質的な豊かさは神の祝福。→ 因果応報と核とする慣習的共同体的な知恵！

(1) 「主がわたしの主人を大層祝福され、羊や牛の群れ、金銀、男女の奴隷、らくだやろばなどをお与えになったので、主人は裕福になりました。」(創世記 24.35)

(2) 「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。あなたは町にいても祝福され、野にいても祝福される。あなたの身から生まれる子も土地の実りも、家畜の産むもの、すなわち牛の子や羊の子も祝福され、籠もこね鉢も祝福される。あなたは入るときも祝福され、出て行くときも祝福される。主は、あなたに立ち向かう敵を目の前で撃ち破られる。敵は一つの道から攻めて来るが、あなたの前に敗れて七つの道に逃げ去る。主は、あなたのために、あなたの穀倉に対しても、あなたの手の働きすべてに対しても祝福を定められ、あなたの神、主が与えられる土地であなたを祝福される。」(申命記 28.1-8)

(3) 「主はその後のヨブを以前にも増して祝福された。ヨブは、羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。彼はまた七人の息子と三人の娘をもうけ、長女をエミマ、次女をケツィア、三女をケレン・プクと名付けた。ヨブの娘たちのように美しい娘は国中どこにもいなかった。彼女らもその兄弟と共に父の財産の分け前を受けた。ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見ることができた。ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。」(ヨブ 42.12-17)

(4) 「主を畏れて身を低くすれば／富も名誉も命も従って来る。」(箴言 22.4)

(5) 「神から富や財宝をいただいた人は皆、それを享受し、自らの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。これは神の賜物なのだ。」(コヘレト 5.18)

7. 聖書における富の問題の多様性について

聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えが存在するが——知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される——、しかし他方、預言書や黙示文学には、貧富の格差や不正という観点からの富あるいは富者に対する強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖

書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりもむしろ富に固執する欲望を批判する議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。

Ben Witherington III, *Jesus and Money. A Guide for Times of Financial Crisis*, Brazos Press, 2010)

Sondra Wheeler

Such a canonical or whole-Bible approach requires that we understand the social as well as the literary context of the given injunctions. (12)

Jewish literature is not simply all in favor of wealth and abundance. And the New Testament is not simply all against having possessions and some prosperity in life. The evidence is more mixed and complex.

Wheeler summarizes what the Old Testament says about wealth and abundance under four headings:

1. Wealth as an occasion for idolatry (Deut.32:10-18; Isa.2:6-8;3:16-24; Jer.5:7; Ezek.7.19-20; 16:15-22; Hos.2:5-9; Amos 6:4-7) The prophets warn about the dangers of wealth leading to idolatry,

2. Wealth as the fruit of injustice (Isa. 3:14-15; 10:1-3; Mic.6:10-12; Jer.5-27-28; Amos 2:6; 4:1-2)

3. Wealth as a sign of Faithfulness (Lev.26:3-10; Deut. 11:13-15; Isa.54:11-12; 60:9-16; Jer.33:6-9)

4. Wealth as the reward for hard labor (Prov.10-21). In the Wisdom literature, labor and its rewards are often contrasted with Laziness. (13)

What, then, are the basic themes on wealth in the New Testament? Wheeler again lists four:

1. Wealth as a stumbling block (Luke 18:18-30)

2. Wealth as a competing object of devotion. In the Gospels, when a person becomes too attached to possessions, a choice is forced, since one cannot serve both God and Mammon (Matt. 6:24; Luke 16:13)

3. Wealth as a resource for human needs. This is a very persistent theme in the New Testament. (14)

4. Wealth as a symptom of economic injustice.

Sondra Wheeler's discussion is a good reminder of that diversity.

These scholars are as different in their theologies as the liberation theologian Justo González is to the evangelical Craig Blomberg. What we will discover is that the self-justifying tendency of modern Christians to hoard wealth and live large have absolutely no basis whatsoever in the New Testament. ... It is the prophetic witness about the perils of wealth and the dangers of greed and idolatry that are most frequently carried forward from the Hebrew Scriptures into the New Testament witness about money and wealth. (15)

8. 現代の思想的文脈

富の問題は、キリスト教をその現実性に即して問う場合に避けて通ることができない。

特に 1990 年代以降の冷戦後の世界において、キリスト教は様々な対立と紛争に関与するものとしてしばしば批判されてきたが、そこには、経済的要因が深く複雑に絡み合っており、こうした議論に対して有意義な論究を行うには、聖書と経済・富との関係を整理することが必要である。

近年、新自由主義的な経済政策の妥当性への疑いが様々な立場から提起されるようになっている。特に問題は、新自由主義的経済と環境危機との関連性である。

9. Witherington

Why a book on money, and why now? Because our economy is in a free fall. We have worked our way into at least a recession. ... we now have to learn to live with less. ... Maybe now is a good time --- even a necessary time --- to reconsider what money means to us and how we use it (and are used by it), and especially to look anew at what Jesus and his earliest followers really taught about wealth and possessions. (7)

10. 「聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えがあり——知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される——、他方、預言書や黙示文学では、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりも富に固執する欲望へと批判の論点を移す議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。

見解の多様性を認めた上で、聖書全体に関しては次の点が指摘できる。(1) 不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。(2) 富あるいは富者についての論評は、共同体（たとえば教会）が置かれた社会的文脈と相関的である。共同体が社会の経済的・政治的な権力構造との関わりを深めるについて、富自体への否定的見解は後退する傾向が見られる。」

（「富」『キリスト教平和学事典』教文館、2009年）